View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

論説

常盤大定の中国調査

渡辺健哉

はじめに

先に公表した拙稿「常盤大定と関野貞――『支那佛教史蹟』の出版をめぐって」（以下「前稿」と略記）では、[1] まず常盤大定（一八七〇～一九四五）の略伝を記し、ついで常盤と関野貞の手によって編まれた『支那佛教史蹟』（以下、『佛教史蹟』と略記）の作成過程を追った。

本稿においては、前稿で得られた知見を踏まえ、常盤の中国における調査について述べていき、加えて、『佛教史蹟』の英訳本（*Buddhist monuments in China*）、さらに『佛教史蹟』から派生した『支那文化史蹟』（以下、『文化史蹟』と略記）と『中国文化史蹟』に至るまでの展開を明らかにしていく。

ただ、以上の事実を述べていくだけではいささか物足りない。そこで、前稿では触れることのできなかった、常盤が中国における現地調査の成果を『佛教史蹟』としてまとめる決意をしたその理由に焦点を当て、そこにたどり着くように叙述を進めていくこととしよう。

なお本稿においても、読者の理解を考慮して、文献引用にあたっては以下の修正を施した。①片仮名は平仮名に、かつ旧字体・旧仮名遣いを新字体・新仮名遣いに改めた。②句読点を補った個所がある。③原典に付されたルビや傍点は一切削除した。④筆者が語句を補う場合には〔　〕を利用した。

一　常盤大定の中国調査の目的

そもそも常盤はなぜ中国の仏教遺蹟の調査に向かったのか。いささか長文になるが、重要と思われるので、第一回目の中国調査の記録をまとめた『支那佛蹟踏査――古賢の跡へ』の序文を以下に引用する。[2]

予は長年の間、支那仏教史を講じて居るが、まだ一度も親しくその地を踏まずしてこれを講ずるのは、何としても靴を隔てて痒を掻くの感を免れぬ。今年こそは、長年の希望なる渡支計画を実行したいものであると、今春以来切な希望を懐いて居た。……やや無謀に近い計画を、いよいよ実行しようとしたのは、次の様な雑多な思わくが、代る代る内から自分を刺戟して已まなんだ為である。一つは自分のみのものであり、一つは社会的とでもいうべきものである。第一は、文献の上のみにて取り調べて居る支那仏教史が、親しくその地を踏査する事によって、幾分にても自分のものになったという気持を得たいのである。また曇鸞の如き、臨済の如き、天台の如き、さてはまた慧遠の如き、法融の如き、居訥の如き、千古の高僧碩徳の遺址を踏んで、是等の人の活き活きした霊を自分の胸に懐い起す機会を得たいのである。これは、自分一己に関するものであるが、猶この外に、心の奥底から暗々の中に自分を刺戟するものがある。聞く所

によると、支那の古代文化は、急転直下の勢で破壊せられて行くそうであるから、願わくば、今の中に、同種同文の邦人の手によりて、出来るだけ之を理解し研究し整理して置きたい。而もその古代文化は仏教によりて経緯せられて居るから、願わくば仏徒の手によってこれを為したいのである。

そもそも、文献からしか知り得ていない仏教史蹟を実見したいということ、また高僧の遺蹟を見学することで彼らを思い起こすきっかけにしたい、という個人的な理由に加え、革命以後の動乱下の中国においてそうした遺蹟が破壊の危機に瀕しており、それを日本人の手によって整理・研究するためであるとしている。明確に示されているわけではないものの、この時代の日本の知識人が共有する中国観――伝統的中国社会に対しては尊崇と憧憬を抱く一方で、現実の中国に対しては軽侮の念を抱いている――を感じさせる一文ではある。しかし常盤に限っていえば、研究のための調査旅行であることは勿論のこととして、仏教徒としての自負が根底に存在したことも留意しておくべきであろう。

さて、中国調査にあたっては、前稿でも述べた、関野貞との関係に触れておかなければなるまい。本稿では、常盤による関野の追悼文「兄と共著の思い出」から、彼らの交流がどのように始まったのかを整理しておきたい[3]。

二人が知り合ったのは「明治四十一、二年頃からであったろう」という。これは常盤が東京帝国大学に講師として着任した頃であり、関野は東京帝国大学工科大学の助教授として、すでに第一回と第二回の調査を終えていた時期に相当する[4]。つまり、東大で同僚となった時期である。その上で共著の「機縁」として三つの出来事を挙げる。

第一に、関野が所有していた泰山石経の拓本を譲り受けたことであった。「おぼろげな記憶を辿って見ると、自分の直接に往来したのは、泰山の石経の拓本を頂戴する為」であり、それは「知命楽天」と「樹徳種義」の拓本であった。常盤は後者を譲り受け、第二回目の調査報告である『支那佛教史蹟』の見返し（表紙の裏側）に貼付している。[5] これは「唯心の底から喜んで居たのを用いたまで」であったが、結果として「一見してこれはと思う様な意匠」となった。確かに、黒地の背景に白抜きの文字が映える、特異なデザインとなっている。

第二に、写真撮影の方法を関野から伝授されたことである。「機械の取り扱いから明暗の関係、時間の調節の事まで、事細かに説明」してくれたばかりではなく、常盤を誘い出して小石川区（現在の文京区）の白山神社において写真撮影の練習まで行ったという。関野の熱心な様子が窺えるし、なによりここまでの配慮をされたら、誰しもが感激するに違いない。

第三に、実はこれがもっとも重要な点であろうと考えられるが、常盤が調査に先立ち、関野の調査記録をすでに閲覧させてもらい、「兄の踏査せぬ個所に立ち入る場合を除き、兄の既に踏査せられて立派な写真のあるものは、自分で撮影せんとの心も起らなかったので、その部分は単に実地之に接見するだけに止めた」という。つまり、常盤は関野の写真との重複を避けたのである。この点について、『支那佛教史蹟』の序文においても、「写真版中の山東・河南のものには、関野〔貞〕・塚本〔靖〕両博士から、複照したものが、可なりに多くある。既に先輩の立派な写真があるのに、之を再照する必要がないから、予は之を照相せなんだ」と記す。このような写真の重複を避けるという判断が撮影時間の節約をもたらし、効率的な調査につながった。その結果、中国を広範にカバーする空前絶後の調査記録――『佛教史蹟』と『文化史蹟』――が生まれたのである。

常盤は関野と出会うことによって、二人の調査成果を共同研究という形で公表することを想起したに違いない。

だがこの両者が成果を集成し、発表する段階に至るまでには、後述するもう一つの決定的な要因が存在する。

二　常盤大定の中国調査の概要

ここでは常盤の中国踏査について整理していく。常盤の調査については、彼自身の手になる記録が数多く公刊されているため、詳細はそちらを参照して頂くとして（後述）、以下では調査地点と資金の出所にしぼってまとめておく。

（1）第一回調査：大正九年（一九二〇）九月二十四日～十年一月五日

奉天、北京、房山石経、大同雲崗石仏寺、張家口霊泉寺、正定府臨済寺・天寧寺、交城県、石壁玄中寺、太原県晋祠、天龍山石窟、龍山道教石窟、風峪、洛陽龍門石窟、漢口、宜昌、玉泉寺、盧山、棲賢寺、白鹿洞書院、秀峰寺、慧遠塔院、南京霊谷寺、牛首山普覚寺、棲霞山、北固山甘露寺、杭州西湖、霊隠寺。

この第一回調査の資金は、真宗大学（のちの大谷大学）学長であった南條文雄を通じて大阪の企業経営者である田代重右衛門から、さらには、浩々洞の同人で真宗の僧侶であった加藤智学を通じて政治家・経営者である橋本信次郎からの援助を受けたという。加えて、真宗の僧侶で朝日新聞記者でもあった安藤正純を通じて「大阪朝日新聞」に現地からの通信を寄稿することも約束したため、[6]その稿料も資金に充てられたとみられる。

帰京後の大正十年一月十八日、関野は「午后六時常盤氏を訪い将来の拓本類を見る」とあるように、[7]常盤邸に赴き調査成果を見学している。同年三月には、東京帝国大学文学部長であった上田萬年の斡旋で「成績発表会」

が催された[8]。

この時の「大阪朝日新聞」の連載記事をまとめ、写真や図版なども増補して整理したものが『支那佛蹟踏査――古賢の跡へ』であり、同年九月に刊行されている。なお附言しておくと、この書物に対しては、北京において常盤とともに房山調査に赴いた武内義雄によって書評が執筆された[9]。

（2）第二回調査：大正十年（一九二一）九月十四日～十一年二月十九日

青島、済南、黄石崖、開元寺、霊巌寺、曲阜、光化寺、泰山、神通寺、玉函山、北京、明十三陵、居庸関、開封相国寺、洛陽龍門、嵩山少林寺、会善寺、嵩嶽寺、中岳廟、碑楼寺、亳州、鹿邑県、老子昇仙台、宝山寺、霊裕塔、大住窟、北邙山、漢口、武昌洪山、嶽麓書院、南嶽、衡州、石鼓書院、潙山、鎮江、芽山、蘇州、霊巌山、上海

この時の調査にあたっては東京帝国大学文学部長服部宇之吉と、教育者として知られる沢柳政太郎の配慮により財団法人啓明会から援助を得られた[10]。

『財団法人啓明会第参回大正拾年度事業報告書』（発行年等不明）には、大正十年度の事業報告が列記されており、そこに「支那に於ける仏教並に関係ある儒、道両教の史蹟の踏査」に対して、「金六千円の補助」がなされたとあり、さらに翌年の事業報告書では「金八千円の補助（踏査費六千円、外に蒐集品整理費二千円）」とあるので、資料整理の費用として二千円が追加されたことになる。

六千円乃至二千円は当時どの程度の価値があったのか。参考までに当時の物価をいくつか紹介しておく。まず、給与についてみると、帝国議会の議員歳費は三千円、総理大臣の月給は千円、東京都知事の年俸は六千円であっ

た。次に日用品・交通費についてみると、米十キロの小売り価格が二円六十六銭二厘、山手線の初乗り運賃が五銭、東京・大阪間の運賃が六円四厘であった[11]。単純な比較はできないが、調査費として計上されている六千円が、当時にあっても破格の金額であったことが窺えよう。なお、前回と同様に「東京朝日新聞」にこの時の旅行記が連載された。

帰国後の大正十一年四月九日、東京帝国大学文学部・啓明会の合同主催による展覧会・報告会が催された。この席で「開会の辞」を述べた東京帝国大学文学部長であった三上参次の言葉が残されている[12]。そこでは、通常の旅行であれば我々でも行けるが、常盤の場合は、現地の中国人や官憲でさえ尻込みするような奥地にまで果敢に踏み込んで行ったことを紹介したのち、

> 常盤博士の如き信仰心の強く、而も其信ずる所の一種宗教上から深き信念を持って居らるる方でなければアゝ云ふことは出来ないといふことを私は深く感じた。

と述べる。常盤をして調査に向かわせたのは、研究者としての探求心はもとより、仏教徒としての「深き信念」であったと三上は看取していた。そして新聞に掲載された調査日誌、及び別に作成した調査記録をまとめて一書にしたものが『支那佛教史蹟』であり、これは大正十二年五月に発刊されている。

（3）第三回調査：大正十一年（一九二二）九月二十九日～十二月十九日

上海、揚州、寧波、海門、台州、華頂峰善興寺、国清寺、普陀山、南京、漢口、磁州、南響堂山、北響堂山、

石窟寺、広済県、四祖山、黄梅県高塔寺、東林寺、鎮江、平山堂、煙霞洞、雲居山聖水寺址

この時の調査では、東本願寺の阿部恵水総長と宮谷法含の尽力により東本願寺より援助を得ることができた。そしてこれまでと同様に「大阪朝日新聞」に寄稿することになった。ただし、現地からの配信という形をとらずに、帰国後の十二月二十三日・二十五日・二十七日の三回に渡る連載記事であった。

この時、帰国の連絡が届かなかったようで、「案ペラ〔筵のこと〕一枚で苦行の常盤師　予定通りに帰京の報なく　心の不安を語る夫人」（「東京朝日新聞」大正十一年十二月七日）と題して、留守宅を預かる夫人千代の様子が報道された。夫人の談話に続き東京帝国大学の講師でかつ僧侶でもあった島地大等の談話も掲載されており、そこには、

常盤さんは今度は石窟に入らず天台の方を研究する予定であった。それに本年中に帰京する筈なのが未だに帰らないので実に我々も心配し、五日木村泰賢さんと共に留守宅を訪ねたがお宅の方へも何の便りがないのでいまも気遣っている始末だ。

とある。なお、この記事によれば、常盤の調査行に対して世間からは「博士の道楽に結びつけ其行動に種々非難の声を発するもの」もいたようであり、こうした声に対して「学界同輩の士等の中には博士のために慨嘆して居」たという。

（4）第四回調査：大正十三年（一九二四）十月八日～十一月六日

釜山、奉天、旅順、青島、済南、長春観、千仏山造像、黄石崖、開元寺、玉函山、神通寺、大仏寺、霊巌寺、西龍洞、普照寺、龍興寺、雲門山

この時の調査では、山形県鶴岡市の実業家である風間幸右衛門からの援助があった。さらに服部宇之吉の配慮により外務省の対支文化事業から千円の補助を得ることができた。[13] この時の調査は常盤と関野による共同調査とみなされていたようである。

当初は直隷・河南を調査する予定であったが、張作霖（奉天派）と呉佩孚（直隷派）との間で戦われた、いわゆる第二次奉直戦争の影響により山東に調査地を変更した。

（5）第五回調査：昭和三年（一九二八）十二月十四日～四年一月三十日

上海、広東、六榕寺、懐聖寺、韶州、南華寺、雲山門、光孝寺、潮州、韓文公祠、開元寺、廈門、南普陀寺、福州、鼓山、大穆溪口、崇聖寺、黄檗山

学術調査としては最後の機会になる。今回の調査にあたっても対支文化事業部からの補助を得られた。これまでの単独行と異なり、佐藤泰舜（記録・通信）、稲葉茂（交渉）、結城令聞（実測）、阿部国治（会計）、龍池透（文献）との共同調査であった。（　）内に記したように、各人の担当も決められた。このときの記録が『支那佛教史蹟記念集』となる。[14] これは門弟・同僚・知友による常盤の還暦を祝賀するものであり、出版にあたっては、「常盤博士還暦記念会」より受領した三千円の寄付金を利用している。[15] のちに永平寺の貫主となる佐藤泰舜が、この調査旅行の手記を公表しており、[16] 口絵には常盤ら同行者との記念写真が掲載されている。

以上、常盤の五回に及ぶ中国調査についてみてきた。常盤が訪問した場所については、本稿の末尾に掲げた附

図を参照されたい。

ここまでの叙述を踏まえて、本稿冒頭で設定した課題――なぜ『佛教史蹟』を出版する決意をしたか――を考えてみよう。常盤は大正九年度、十年度、十一年度と連続して調査を行ってきた。ところが、十二年は行わず[17]、十三年に再開している。加えて担当する授業の関係からであろう、必ず九月に出発していることに注目したい。換言すれば、なぜ大正十二年の九月に調査に赴かなかったのか、ということになる。もはや贅言を要すまい。これは「行かなかった」のではなく、「行けなかった」のである。この点にこそ『佛教史蹟』編纂を決意した理由が秘められていると筆者は推測している。以下、章を改めて検討を加えていきたい。

三　『佛教史蹟』の出版に至るまで――その理由と編集過程

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、轟音とともに巨大な地震が突如として関東一円を襲う。死者・行方不明者十万五千人余、被害家屋三十七万棟以上に及ぶ、関東大震災の発生である[18]。震災は人的被害のみならず、数多くの貴重な文化財にも甚大な被害をもたらした。内田魯庵「典籍の廃墟――失はれたる文献の追懐」には東京における美術品や書籍の被災状況が克明に記録されている[19]。

当然、この大震災は常盤と関野にも大きな被害をもたらした。のちに常盤は「学藝　支那佛教史蹟の公刊と新発見（上）」（「東京朝日新聞」大正十四年六月四日）で次のように回想している。

一昨年の大震火災の厄に罹り、帝大に寄託して置いたおびただしき拓本を一朝に失った時は、名状すべか

らざる哀愁を感じた。中には再度の踏査を敢行すべき勇気の出ない処も一二箇所ではないが今更死児の齢を数へぬ。この材料を失っても、其前後に輯集した鮮なからぬ資料が、年と共に乱雑になって行く。存外に多大の時間と労力と資材とを投じて、辛くも整理したものが、今回公刊した『支那佛教史蹟』である。

文章の前半で述べられているように、これまで苦労して将来した資料が一瞬で灰燼に帰してしまったため、常盤は「名状すべからざる哀愁を感じた」のである。さらに地震の直後には、大地震の余震とそれに伴う噂話の類もしばらくの期間広まり、なかには次なる大地震を予測するものさえ現れた[20]。このような状況下、頻発する余震や報道を受けて、残された資料が失われてしまうかもしれないという恐れに常盤が駆られたとしても決して不思議なことではない。いずれ時機をみて資料をまとめる心算はあったであろうが、関東大震災をきっかけとして、常盤はこれまでの調査の整理を決意し、『佛教史蹟』出版に至ったと筆者は考えるのである。

さて、『佛教史蹟』の編纂過程は前稿において明らかにしているため、ここではその結果だけ触れておく。

【図版】

一：大正十四年五月廿日発行　昭和三年十一月補正発行
二：大正十四年十月冊一日発行　昭和二年九月廿日補正発行
三：大正十五年三月三十日発行　昭和二年七月十日補正発行
四：大正十五年十一月三日発行　昭和二年十二月一日補正発行
五：昭和二年四月廿二日発行

記念集：昭和六年十月十五日発行

【評解】

一：大正十四年六月八日発行　昭和四年四月五日発行

二：大正十五年四月十七日発行

三：昭和元年十二月二十九日発行

四：昭和二年十二月廿五日発行

五：昭和三年三月三十一日発行　跋文　昭和三年三月十三日

記念集：昭和六年十一月八日発行

最後の記念集だけは、前述したように常盤の還暦を記念するものであるため、常盤の単著となっている以外は、すべて関野との共著である。一方で、行程記録は、すでに触れたように、『支那佛蹟踏査　古賢の跡へ』『支那佛教史蹟』『支那佛教史蹟記念集』としてまとめられていたが、その間の二回の調査成果も加えてまとめ直した『支那佛教史蹟踏査記』がのちに印刷される[21]。随所に示される所感も含め、一九二〇年代の中国社会の実状を探るうえでも資料的価値は高い。

四　『支那文化史蹟』から『中国文化史蹟』へ

以下では、『佛教史蹟』のその後の展開について述べていきたい。

(1) *Buddhist monuments in China* の出版

前稿でも触れたように、関野と常盤は『佛教史蹟』執筆当初から自らの成果を世界に発信するため、『佛教史蹟』の英訳を構想していた。それは解説である「評解」を英訳した *Buddhist monuments in China* として結実する。執筆者は常盤大定と関野貞、出版元は「BUKKYO-SHISEKI KENKYU-KWAI」、すなわち「佛教史蹟研究会」であり、版元の住所も常盤の自宅であるため、『佛教史蹟』と同じく自費出版の形で公刊された。

ところで、この本に訳者名は明記されていない。常盤には英書の翻訳があり、また大学の非常勤講師として英語を教えていた経験もあるため[22]、自らの手で翻訳したと筆者は勝手に思い込んでいた。しかしながら、序文で「Professor Daisetz Teitaro Suzuki」、すなわち当時大谷大学教授であった鈴木大拙（貞太郎）に対して謝辞が述べられていることからも明らかなように[23]、英語に堪能であった鈴木大拙の強力なサポートのあったことが分かる。否、これは「協力」などというものではない。すでに公表されている鈴木大拙の英文日記と[24]、『鈴木大拙研究基礎資料』に収録されている、未公刊の日記などの膨大な資料にもとづいた「年譜」に則して鈴木の行動を追跡していくと[25]、むしろ「共訳」と記しても過言ではない実態が明らかになった。以下ではこうした資料に導かれながら英訳作業を復元していきたい。

鈴木の英文日記によるかぎり、この件で最も早く常盤と鈴木との接触が確認されるのは、大正十四年三月七日のことである。関野『日記』においても、四月十四日（火）に「午前　大学へ常盤博士来訪、支那仏教史蹟図版挿入英訳論議。」とある。鈴木との打ち合わせを先に済ませたうえで、関野に英訳の話題を持ち出したとみられるので、大正十四年の早い時期で英訳の構想が持ち上がっていたのであろう。鈴木の英訳作業は同年八月二十日から開始され、八月二十九日には第一稿が完成した。これはPART I、すなわち第一冊のための作業で、翌

十五年二月二十五日に完成している。

PART Ⅱの英訳作業に鈴木が取り組み始めたのは、約二十ヶ月後の翌昭和二年十一月二十日のことであった。昭和三年（一九二八）一月五日から十二日まで、鈴木の居宅であった鎌倉の円覚寺正伝庵でInaba氏（不詳）とともに鈴木は英訳に務めた。引き続き同年八月七日から九月十六日まで作業が継続された[26]。いつの時点で完了したかは不明であるが、発行された時期を考慮すると、これから一年近くを費やしたのかもしれない。ここまで常盤の英訳作業への関わりは判然としない。だが、次のPART Ⅲからは確実に共同で翻訳を行っていることが分かる。

PART Ⅲの英訳作業は約一年半後の昭和五年一月五日から始動する。この時は熱海に滞在していた鈴木のもとに常盤が合流し、十二日の午後五時まで共同で作業を行った。同年七月十七日午前八時に常盤が鈴木のもとを訪れ、七月二十三日まで作業が継続された[27]。九月にも常盤が京都の鈴木の自宅を訪ね、三日から八日まで作業を行う。ここまでがPART Ⅲの英訳であった。こののち、常盤が交通事故に巻き込まれ入院したため、作業の中断を余儀なくされる[28]。

PART Ⅳの英訳作業は、昭和八年一月六日に常盤が鈴木のもとを来訪し、夏の温泉での作業を提案したことから始まる。この時は十三日まで英訳を行った。七月二十三日、上野駅で鈴木は常盤と合流し、午後十一時十五分発の列車で猛暑の東京を抜け出して北上する。翌朝七時三十分に白石駅に到着し、バスに小一時間ほど揺られ、午前九時三十分に宮城県白石市の青根温泉（蔵王山の東麓）に到着するや、ただちにその日の午後から二人で英訳作業を開始している。以後、散歩をして気分転換もはかりつつ、十一連泊してひたすら作業に励んだ。八月四日の早朝に青根温泉を発ち、仙台に向かう。常盤の招待によって仙台の市内観光をするためである。その日の夜

は常盤の自坊道仁寺に宿泊した。翌朝仙台を出発し鎌倉に戻る。その後の九月三日から九日までも引き続き作業が続けられた。これでPART Ⅳが完成したとみられる。[29]

最後のPART Ⅴについては、「年譜」に「昭和九年八月　宮城県青根温泉へ常盤大定と、英訳手伝いのため一週間ほど滞在。」と記されている。[30]

評解の英語版であるTEXTの発行年月日をまとめると、以下のようになる。

TEXT PART Ⅰ：大正十五年十一月五日発行
TEXT PART Ⅱ：昭和五年二月五日発行
TEXT PART Ⅲ：昭和六年十一月十五日発行
TEXT PART Ⅳ：昭和十二年四月十五日発行
TEXT PART Ⅴ：昭和十三年二月廿五日発行

以上、確認してきたように、常盤が英訳し、それを鈴木が校閲したなどといった形式的な協力関係では決してなく、ほぼ共訳に等しいものであったことが明らかになった。

鈴木が共訳者に選ばれた理由として二点が考えられる。なによりもまずその卓越した英語力に求められよう。外国語圏に滞在し、その国の言語を使い続けていれば、〈読む・聞く・話す〉は、程度の差こそあれ、ある程度は使いこなせるようにはなるであろう。しかしながら、〈書く〉となると決して容易なことではない。この点において、滞米経験も長い上に英文の著作もある鈴木の英語力は申し分がなかった。加えて、仏教用語に習熟して

いた点も英訳において力を発揮したに違いない。

以上の点からすれば、鈴木以上の適任者はいなかったという点においても、鈴木が共訳者として選ばれたことは必然といえる。にもかかわらず、本書に共訳者として鈴木の名前が明記されることがなく、また鈴木の著作目録でもこれに触れた記載が一切見られないことは不可解といわざるを得ない。推測をたくましくすれば、それは決して功名心から翻訳に協力したのではなく、この事業を世界に広める使命感に駆られたためではなかろうか。この成果は世界に広めるだけの価値があると鈴木自身が見出したからこそ、この事業に協力したのではないかと筆者は考える。このあたり別の事情が背後に隠されているのかもしれないが、さしあたっては以上のように考えておきたい。

（2）『支那文化史蹟』の出版

関野の没後、常盤の手によって『文化史蹟』が昭和十四年四月から昭和十六年九月にかけて京都の一書肆である法蔵館より出版された。「文化交流の金字塔　常盤博士の「支那文化史蹟」完成」（「読売新聞」昭和十六年九月五日）と題した新聞記事に、常盤の談話が掲載されている。

> 心持ちとしては私の専門の支那仏教の研究の立場からと、一つには仏心を通じて日支の文化交流をはかりたいという念願、又第三にだんだん滅出してゆく支那の文化史蹟をいつまでもいつまでも保存しておきたい動機からはじめたのです。

当時は日中戦争のさなかであり、報道を通じて中国各地の戦況が刻一刻と伝わっていたこともあって、社会的関心も高かったとみられる。とくに『文化史蹟』には数多くの写真が収録されているため、大衆の関心を引き寄せやすかったのであろう。販売も好調だったようで、第一回配本は発売と同時に品切れとなった[31]。

内容は大幅に拡充され、仏教のみならず道教・儒教にまつわる史蹟と一般の史蹟も加えられ、十二分冊（図版十解説）で出版された。常盤と関野が訪れていない場所であっても、これまでの研究を踏まえて増補された。たとえば、第十巻では四川が取り上げられているが、常盤・関野は四川での調査を行っていない。そのため解説は伊東忠太の調査にもとづいたと明記しており、写真も伊東撮影のものが転用されている。つまり、『文化史蹟』はそれまでの日本人研究者による調査や彼らによって撮影された写真の集大成ともなった。

（3）『中国文化史蹟』の出版

一九七〇年代になって『文化史蹟』が『中国文化史蹟』とタイトルを変えて同じ法蔵館から出版される。その経緯を島田正郎「あとがき」によりながら述べていく[32]。

『文化史蹟』が発刊されたのち、常盤は他の研究者が行った中国東北部と内モンゴルの調査成果も加えた形での増補版を構想しており、これについては東京帝国大学文学部（考古学）の原田淑人に委嘱していた。原田はさらにそれを東方文化学院の研究員であった竹島卓一と島田正郎に託し、自らは全体の監修にあたることになった。こうして準備された『文化史蹟』の増補版は出版直前まで進められたものの、昭和二十年三月の東京大空襲、そして六月の東方文化学院蔵書の疎開、引き続く敗戦の大混乱もあり、事業は頓挫してしまった。しかし、それらの関連資料は島田の元で大切に保管されていたため、昭和四十八年十月になって法蔵館の松川健文が島田のもと

を訪れ、再刊が決定したという。

おりしも前年の昭和四十七年九月には田中角栄首相の率いる政府代表団が北京を訪問し、日中国交正常化にこぎつけたこともあり、日本でも中国への大衆的関心が高まっていた。法蔵館としてはそうした時機も考慮に入れたうえで再刊を決断したと考えられる。

図版はすべて洋装本に、解説は上下二巻に仕立て直され、あらたに「1　人名」「2　建造物（墓陵を含む）」「3　地名」「4　書名」「5　件名（碑名、寺記などを含む）」の索引が付された[33]。増補版には、中国東北部と内モンゴルの「図版」とともに島田正郎「通説」と竹島卓一「図版解説」が収められている。中国では戦争に継ぐ内戦、そして文化大革命期の混乱もあって、数多くの文化施設や宗教施設が破壊を被ったため、この図録に残された一九二〇年代の遺蹟の写真や彼らの記録が今後も学術的価値を有し続けることは疑いない。

『佛教史蹟』が明治維新直後に生まれた人による「学問の産物」であったとすれば、これに続く『文化史蹟』と『中国文化史蹟』は、結果としてではあるが、日中戦争や日中国交正常化を背景とした、いわば「時代の産物」となったといえよう。

むすびにかえて――常盤大定と鈴木大拙、そして西田幾多郎

本稿では『支那佛教史蹟』から『支那文化史蹟』『中国文化史蹟』出版に至るまでの過程を既知の資料を使って組み立てていった。本稿で明らかにした点を以下にまとめておきたい。

①常盤による中国調査の概要：本稿では資金の出所について指摘した。

②『支那佛教史蹟』編纂の動機：関東大震災にこれを求めた。
③ *Buddhist monuments in China* の出版：鈴木大拙の日記に依拠しながら、翻訳にあたって彼が重要な役割を果たしていたことを明らかにした。
④『支那文化史蹟』と『中国文化史蹟』出版の背景：当時の時代風潮を背景とした出版物ではなかったか、と推測した。

本稿の考察により明らかになった事実の一つとして、鈴木大拙との関係がある。このように常盤とつながりのある人物を探っていき、さらにその人物に連なるネットワークを重層的に積み上げていくことで、学術界・仏教界における常盤の立ち位置とともに、彼の人間像がより一層明確になっていくと考えている。

そこでこうした点の覚書として、最後に学習院ともゆかりが深い鈴木大拙及び西田幾多郎と常盤大定――三人は同年（一八七〇）の生まれである――との交流について触れておきたい。

本稿で触れたように、鈴木大拙は『支那仏教史蹟』の英訳作業を通じて常盤と関係があった。鈴木は明治三十年（一八九七）三月にアメリカに渡り、イギリスやフランス等を歴訪したうえで、四十二年四月に帰国し、八月から学習院で英語の講師として勤務を行う。翌年四月には学習院の教授となり、大正十年（一九二〇）までの十三年間にわたり学習院で教鞭をとった。東京で活動をしていたこの時期に常盤と接触していた可能性はあろう。

さらに鈴木の「心友」として知られる寸心＝西田幾多郎と常盤との接点もわずかながら確認できる。

明治四十三年は西田にとって人生の転機となる年であった。なぜなら九月から京都帝国大学の助教授に任じられ、一年間在職した学習院を離れるからである。[34]

学習院を離れ、京都に向かうにあたり、七月十四日に神田の学士会で西田の送別会が催された。西田の日記によると参加者は、「来会者、井上、元良、中島、狩野、姉崎、常盤、中島（徳）、戸川、茨木、八田、大島（正）、宮森、得能、紀平」と記されている。[35] 井上哲次郎・狩野亨吉・姉崎正治などといった当代を代表する学者とともに常盤の名前が連ねられていることからすれば、相当近い関係であった可能性が高い。加えて、鈴木の英文日記によると、のちの昭和五年（一九三〇）九月六日、京都を訪れた常盤が、西田・鈴木と会食している事実も確認できる。

さらに述べておけば、京都帝国大学で西田の同僚となる朝永三十郎は、常盤と旧制第一高等中学から東京帝国大学に至るまで同級生であった。のちに朝永は常盤の追悼文をしたためているため、[36] 常盤と朝永との交流は晩年まで確認できる。この朝永を通じて常盤に関する情報を西田が得ていた可能性もあろう。

昭和二十年五月五日、常盤は仙台の自坊道仁寺で逝去する。奇しくも同年六月七日、西田も鎌倉の自宅で逝去する。西田・鈴木、そして常盤との間でどのような学問的対話がなされたのであろうか。西田と鈴木との間に常盤という一本の補助線を引くことで、近代日本における思想史の展開に新たな一石を投じうるかもしれない。

最後に改めて触れておきたいことがある。本稿の執筆を通じて、未曾有の震災が人々に及ぼす影響を改めて痛感した。関東大震災が常盤らに資料の保全を決意させたという筆者の推測が正しいものと確信するのは、東日本大震災の発生以降いまもなお続く様々な自然災害の驚異を実感しているからこそでもある。人智では計り知れない事態に直面せざるをえなくなった時、人間はいかに処すべきか。この普遍的な問いがいまも我々に投げかけられているような気がしてならないのである。

註

（1）拙稿「常盤大定と関野貞――『支那佛教史蹟』の出版をめぐって」（平勢隆郎・塩沢裕仁〔編〕『関野貞大陸調査と現在Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、二〇一四年所収）二三―三九頁を参照。

（2）常盤大定『支那佛蹟踏査――古賢の跡へ』（金尾文淵堂、一九二一年）の「緒言」を参照。

（3）常盤大定「兄と共著の思ひ出」（『建築雑誌』第四九輯第六〇五号、一九三五年十一月）三四―三六頁を参照。

（4）関野貞の中国調査については、徐蘇斌「東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム――関野貞と中国建築史研究」（『国際日本文化研究センター日本研究』第二六巻、二〇〇二年十二月）五三―一四一頁を参照。

（5）常盤大定『支那佛教史蹟』（金尾文淵堂、一九二三年）を参照。

（6）安藤正純（一八七六～一九五五）は、真宗大谷派真龍寺住職の次男に生まれ、朝日新聞記者を経て、大正九年に代議士に当選する。政界に入ってのちは、文部参与官や文部政務次官を歴任した。自らが僧籍を有していたこともあり、大正から昭和初期にかけて宗教と政治との間に立って、さまざまな方面で活躍した。前稿二九頁も参照。

（7）『関野貞日記』（中央公論美術出版、二〇〇九年）を参照。以下『日記』と略記。

（8）三月十七日付けの「東京朝日新聞」には三月二十三日に「開催予定」とあるが、『日記』には三月十九日に行われたとある。

（9）武内義雄「常盤博士著「古賢の跡へ」を読む」（『史林』第七巻第一号、一九二二年一月）一五五―一五九頁を参照。この書評については、東北大学大学院文学研究科の齋藤智寛准教授より教示を得た。記して謝意を表したい。なお、常盤大定と武内義雄との交流については、拙稿「東北大学附属図書館蔵「玄奘三蔵求法像」をめぐって――常盤大定と汪兆銘政府をつなぐ一幅」（『集刊東洋学』第一一二号、二〇一五年一月）九四―一〇四頁も参照。

（10）啓明会とその設立者の平山成信については、福田須美子「平山成信と啓明会」（『相模女子大学紀要（C）社会系』第七七巻、二〇一四年三月）四九―五九頁を参照。

（11）以上の給与や物価については、森永卓郎〔監修〕『明治／大正／昭和／平成　物価の文化史事典』（展望社、二〇〇八年）を参照。

（12）『啓明会第七回講演集』（啓明会事務所、一九二二年）

には、東京帝国大学文学部長三上参次「開会の辞」に引き続き、「支那佛教史蹟の踏査報告」と題する講演会の書き起こしと、そこで展示された「展覧拓本目録」が掲載されている。なお、本書は前掲註（5）常盤大定『支那佛教史蹟』にも転載されている。

(13) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05015214300（第2～12画像）、補助関係雑件第一巻（B-H-04-00-00-01-00-00-00-01）（外務省外交史料館）。アジア歴史資料センターで公開している資料の表記法は、同センターのホームページ「論文等への引用」を参照した（二〇一五年九月一日閲覧）。

(14) 常盤大定『支那佛教史蹟記念集』（佛教史蹟研究会、一九三一年）を参照。

(15) 実行委員長は宇井伯寿、副委員長は宮本正尊であった。『常盤博士還暦記念　仏教論叢』（弘文堂、一九三三年）の「あとがき」を参照。

(16) 佐藤泰舜『南支の禅蹟を探る』（古径荘、一九五九年）を参照。

(17) 本稿の趣旨とは直接関係ないため、あくまで参考として記しておく。伊香賀隆「大倉邦彦の「宇宙心」考」（『大倉山論集』第五八輯、二〇一二年三月）二三七―二八三頁によると、大倉洋紙店の三代目社長であった邦彦は、この大正十二年（当時四十一歳）に東京大学の経済学部と文学部で聴講生として学んでおり、その時に常盤による「仏性論」と題する講義を聴講した。当時のノートが大倉精神文化研究所に残されており、それによると、その講義はのちに『支那に於ける仏教と儒教・道教』（東洋文庫、一九三〇年）「第七章　陸象山と仏教」に収録された内容とほぼ同じであったという。なおこの論考によると、大倉が好んで揮毫した「宇宙心」という言葉は常盤のこの時の講義に由来するという。

(18) 内閣府中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会〔編〕『一九二三　関東大震災報告書』（二〇〇六年）四頁を参照。

(19) 内田魯庵「典籍の廃墟――失はれたる文献の追懐」（山本美〔編〕『大正大震火災誌』改造社、一九二四年、のち『内田魯庵全集　八』ゆまに書房、一九八七年所収）二八〇―三六七頁を参照。

(20) 関東大震災を予言したとされる今村明恒は各地で講演し、特に大阪を中心とする関西での地震を警告した（同年十月十日の講演「大地震に関する大阪の宿命に就いて」『地震講話』岩波書店、一九二四年所収）、実際に翌年の四月二日、四月四日、そして五月二十一日にも巨大地震が発生した。

(21) 常盤大定『支那佛教史蹟踏査記』（龍吟社、一九三八

年）を参照。

(22) 明治三十四年五月から天台宗大学（大正大学の前身）において講師を嘱託され、三十八年三月まで務めた。これは非常勤講師だったようで、英語を教えたという。正確に述べると、天台宗大学とよばれるのは明治三十七年から大正二年のことで、常盤が講師として勤めた当初は天台宗東部大学黌とよばれていた。『大正大学五十年略史』（大正大学五十年史編纂委員会、一九七六年）一一七頁、一二八頁を参照。

(23) 序文には、

And we have to be especially grateful to Professor Daisetz Teitaro Suzuki,of Otani University, Kyoto,whose help has greatly facilitated the issue of this English edition.

と謝辞が記されている。

(24) 桐田清秀〔編〕「D.T.Suzuki's English Diaries Ⅰ. The 1920s」（『松ヶ丘文庫研究年報』第十九号、二〇〇五年三月）三七―一二二頁、同「D.T.Suzuki's English Diaries Ⅱ. The Early 1930s」（同第二十号、二〇〇六年三月）一―一四八頁を参照。

(25) 桐田清秀〔編〕『鈴木大拙研究基礎資料』（財団法人松ヶ丘文庫、二〇〇五年）一〇―二二七頁を参照。

(26) 以上の記述は、前掲註（24）桐田清秀〔編〕「D.T.Suzuki's English Diaries Ⅰ」にもとづく。「Inaba」は不明。

(27) 『鈴木大拙全集〔増補・新版〕第三十六巻』（岩波書店、二〇〇三年）には、明治二十一年（一八八八）から昭和十四年（一九三九）までの書簡六百五十四通が収められている。そこに収録される「四九三」（五四三頁）の「妻ビアトリス宛の英文書簡」（昭和五年七月十九日付）にも、常盤が連日のように鈴木を訪れて翻訳作業に従事していることが記されている。

(28) 詳しくは前稿二七頁を参照。

(29) 以上の記述は、前掲註(24)桐田清秀〔編〕「D.T.Suzuki's English Diaries Ⅱ」にもとづく。

(30) 前掲註（25）桐田清秀〔編〕『鈴木大拙研究基礎資料』八九頁を参照。

(31) 昭和十四年（一九三九）七月一日印刷、七月五日発行の記載がある、月報第二号（第二回配本分、第二輯）には「後記」が付してあり、第一回目の配本が「発表旬日にして予定部数を突破して、遂に品切とな」ったことを詫びたのち、以下のように記す。

第三輯「広東・湖南」は目下製版中でありますが、期せずして本夕（六月二十七日）の新聞は、わが汕頭攻略部隊は怒濤の如く、北上して潮州へあと一里の地点に進撃しつつあることを報じておりま

す。湖南は長沙暴戻なる支那軍の焦土戦術のため灰燼に帰したといいます。広東・岳州は既にわが皇軍の威武下にその文化工作は着々と進行中であります。それにつけても一日も早く支那の重要地点がわが皇軍の手に確保されるのが待たれるのであります。

とある。当時盛んに喧伝された「暴戻なる支那」という表現にこの文章の背景が端的に示されている。

(32) 島田正郎については、拙稿「島田正郎が残したものと契丹国研究の現在――島田正郎著『契丹国』の新装版刊行によせて」(『東方』第四〇九号、二〇一五年二月)八―一二頁も参照。

(33) 加えて新しい月報も挿入された。一回の配本につき二冊ずつ刊行されたため、月報は全七冊である。参考までに、執筆者とタイトルを以下に掲げておく。

第一回配本分：横超慧日「中国文化史蹟と常盤博士」・日比野丈夫「中国史蹟探訪の思い出」

第二回配本分：宮川寅雄「雲岡石窟の近影」

第三回配本分：中田勇次郎「北魏の造像と墓誌銘」・窪徳忠「私のみた道観と道教」

第四回配本分：小林隆彰「最近の中国仏教事情と天台宗」

第五回配本分：町田甲一「龍門再訪記」・牧田諦亮「山西石壁玄忠寺に詣でて」

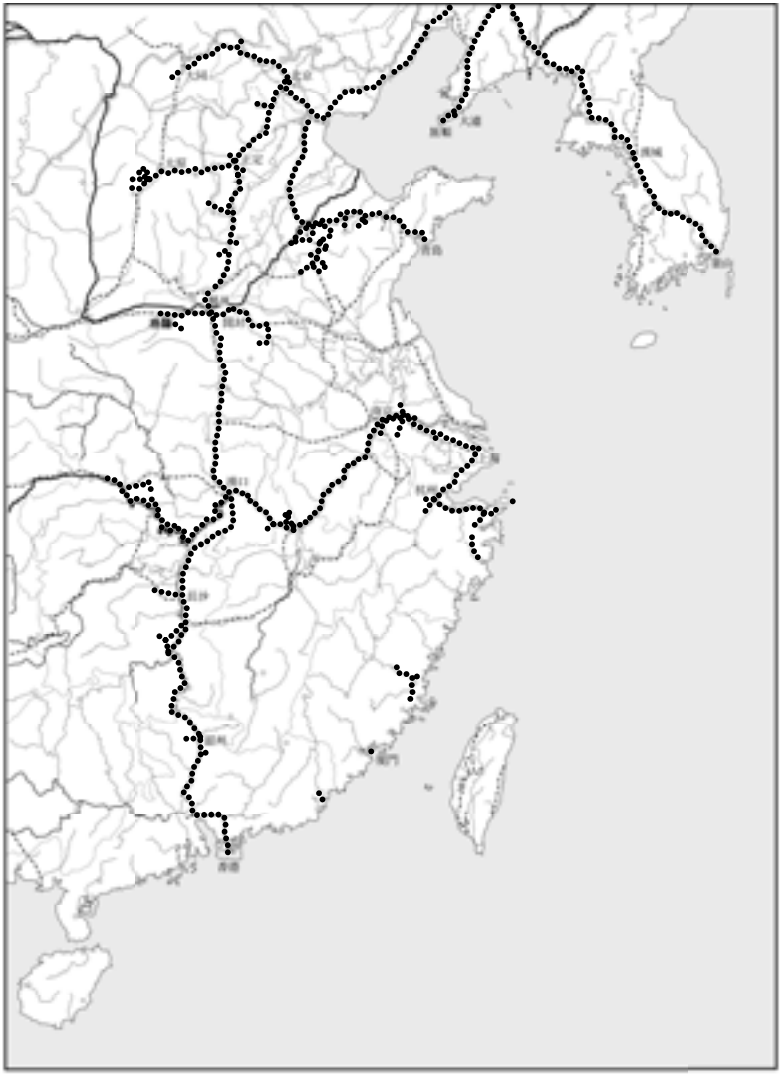
第六回配本分：結城令聞「数かずの思い出」・小野勝年「足の文化史」

第七回配本分：関野雄「新中国における文化財の保護」・道端良秀「中国仏教の現状」

(34) 西田の学習院時代については、日記や書簡を駆使して西田と学習院の関わりを多方面から分析した、長佐古美奈子「西田幾多郎と学習院――明治四二年学習院の諸様相」(『学習院大学史料館紀要』第一二号、二〇〇三年三月)一五三―一八四頁を参照。

(35) 『西田幾多郎全集〔新版〕第十七巻』(岩波書店、二〇〇五年)二六五頁を参照。なお、参加者の一人である井上哲次郎の日記はこの日のことを、「西田幾多郎の送別会に学士会事務室に赴く」と記す。村上こずえ・谷本宗生「井上哲次郎『巽軒日記―明治四三年―』」(『東京大学史紀要』第三三号、二〇一五年三月)六一―一一四頁を参照。

(36) 朝永三十郎「常盤君の想出」(『丁酉倫理会倫理講演集』第五一二輯、一九四五年八月)一六―一七頁を参照。なお、当該号には、塚原政次を筆頭に七名による常盤に対する追悼文が寄せられている。ちなみに翌月に発刊された同誌(第五一三輯)には、桑木厳翼と八田三喜による西田に対する追悼文が掲載されている。



【附図】常盤の足跡を……で記した（『支那佛教史蹟踏査記』の附図をもとに作図）。